

『ドラキュラ』における異性を疎外する絆：手記の 閲読と秘密の共有

浅田, えり佳
九州大学大学院：博士課程

<https://doi.org/10.15017/1909516>

出版情報：九大英文学. 58, pp.1-17, 2016-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン：
権利関係：

『ドラキュラ』における異性を疎外する絆

一手記の閲読と秘密の共有

浅田 えり佳

はじめに

『ドラキュラ (Dracula)』(1897)において、善きイギリス人の敵である吸血鬼ドラキュラは、敵国や異民族など当時の情勢を反映した様々な敵の姿を寄せ集めたキメラである。本論では特に、精神的な性を転換させる者としてのドラキュラの性質、及び彼に敵対する人々のジェンダー及びセクシュアリティに着目する。本作品は大きく分けて、日記・手紙・記事の三つのタイプの文章から構成されているが、このうち日記と手紙について、そこにジェンダーやセクシュアリティに纏わる秘密が記され、それを他者に読ませるという行為によって同性間での秘密の共有や、異性に対する暴露がなされているということを確認し、ドラキュラの性の転換者としての役割を踏まえた上で、作品に含まれる家父長的価値観や理想の女性の描出などを考察する。

I. 乙女同士の絆

まず、ここで乙女という表現を用いたのは、父権的価値観の支配する社会において結婚は夫への従属・夫の優先を意味し、未婚女性は既婚女性に比べて男性による支配から比較的自由であるために、別にして考える必要がある

* 本稿は日本英文学会九州支部第 67 回大会（平成 26 年 10 月 26 日、於：福岡女子大学）における発表内容に加筆修正を行ったものである。

からである。

ミナ・マレーとルーシー・ウェステンラの二人は長年の親友同士ではあるものの、その性質は対照的である。ルーシーは三人の男性から求婚される魅力的な女性で、母子家庭ながら生活のための労働に追われることもなく、男爵の爵位を持つアーサー・ホルムウッドと婚約することからも比較的裕福な家の娘であることが推察できる。一方のミナは教職に就いている職業婦人であり、結婚後に夫の仕事を支えられるようタイピングを学んでいる。つまり、ルーシーは美貌と財力を備え、複数の男性たちから求婚されるという古いヒロインのアイコンであり、ミナは知性と職を持った近代的な女性のアイコンなのである。

このように性質や境遇において異なった点を持つ二人だが、ドラキュラに吸血された後にミナは吸血鬼になること無く生き延びたのに対し、ルーシーは吸血鬼へと変わってしまう。この明暗をわけた要因は、彼女たちのセクシュアリティの差異にあると考えられる。ルーシーは複数の男性をその美貌で魅惑する<女>であり、ミナはただ一人の婚約者に尽くす<妻>であり<母>なのである。以下は六月二十四日のミナの日記だが、港町の老人たちはルーシーに夢中でミナには見向きもしていないことが記録されている。

I noticed that the old men did not lose any time in coming up and sitting near her [Lucy] when we sat down. She is so sweet with old people; I think they all fell in love with her on spot. Even my old man succumbed and did not contradict her, but gave a double share instead. (86, emphasis added)

それに対して、以下はルーシーの死を嘆くアーサーをミナが慰める場面である。

We women have something of the mother in us that makes us rise above smaller matters when the mother-spirit is invoked; I felt this big, sorrowing man's head resting on me, as though it were that of the baby that some day may lie on my bosom, and I stroked his hair as though he were my own child. (236, emphases added)

牙を挿入し、血という体液を交換する吸血行為は性行為に準じ、ドラキュ

ラはそれを以て人間のセクシュアリティを暴く存在であるとするのは、多くの先行文献でも述べられていることだが¹、同じドラキュラの被害者であるこの二人の性的魅力の有無は『ドラキュラ』を読み解く上で非常に重要なポイントなのである²。

ドラキュラがロンドンに現れてヴァン・ヘルシングらと対峙するまでの間、物語の軸となる女性はルーシーである。彼女が襲撃されるのは東の港町ウィットビーだが、イギリスが文明、トランシルヴァニアを未開とされるのに加えて³、ロンドンとウィットビーの間にも西を文明、東を未開とするアレゴリーが読み取れる。前半部では美貌の令嬢が夜な夜な怪物に襲われるというステレオタイプなゴシック小説のプロットが展開されており、その舞台であるウィットビーが時代遅れかつ男性優位の世界を象徴していることを示すように、登場する住人たちは老爺ばかりである。ルーシーという人物の特性やこの場をあわせ読むと、美しく無邪気な女性を重んじ、男性のものとき

¹ Eltis 456、角田 26、川本 217-18、福田 17、度会 23、24、宮地 161、163。

² Eltis は Lucy がステレオタイプの‘New Woman’のように“aberrant sexual appetite” (457)

を秘めているとし、男性の領分である知性を持ちつつも貞淑な女性らしく振る舞うことを忘れず、夫に献身的なミナと比較して、“Aggressive female sexuality is a source of terror in *Dracula*, but it is the old-fashioned Lucy who becomes a predatory vampire, while the professionally skilled Mina remains demurely monogamous.”(464) としている。また、宮地氏はホモソーシャルな絆を強化するためにミナは利用されているとし、「男性の精神を高めて行くには官能的なセクシュアリティから遠く離れていなければならず、それゆえミナには、ルーシーが隠し持っていた危険な官能性が与えられることはない。」(170) と指摘している。他、Senf はミナが他の女吸血鬼と違って母性を強調されていること (46) 及び吸血された際に快感では無く恐怖を感じていること (47) を、川本氏は性的に放縱なく新しい女>とく女吸血鬼>の関連を指摘している (216-17)。

³ Smith 141-42、度会 23。

れていた知性や勇気のある女性を軽視する旧弊的な価値観が支配していることがうかがえる。ここでのミナは、ルーシーを見守り世話を焼く乳母役であり、ドラキュラも一人歩きをするミナに見向きもしていない。なぜならこの古い世界では、性的魅力を持った女が崇拜と欲望の対象となるべきであり、知性に優れ、貞淑な—性的魅力を発しない—ミナは襲撃する価値の無い存在にすぎないからだ。

その後、ミナがドラキュラの被害者となり複数の男性たちから崇拜されるに至るのだが、それは舞台が旧弊的な田舎町から近代的なロンドンに移行したことに伴い、ミナ—女性の価値を判定する基準も変質したからだと考えられる。崇めるべき・守るべき女性としての性質が、ルーシーの持つ身体的な美しさからミナの持つ知性や献身に変化していることが以下の部分からも明らかである。

She [Mina] is a God's women, fashioned by His own hand to show us men and other women that there is a heaven where we can enter, and that its light can be here on earth. So true, so sweet, so noble, so little an egoist – and that, let me tell you, is much in this age, so sceptical and selfish.

(198, emphasis added)

She [Mina] has man's brain – a brain that a man should have were he much gifted – and women's heart. (240)

最終的に幸福な結婚生活を送ることなるミナだが、彼女だけが救済された理由は、端的に言えば彼女の持つ〈母〉・〈妻〉としての貞淑さである。二人の差については、Sos Eltis が³“Corruption of the Blood and Degeneration of the Race: *Dracula* and Policing the Borders of Gender” (2001) で、以下のように述べている。

Aggressive female sexuality is a source of terror in *Dracula*, but it is the old-fashioned Lucy who becomes a predatory vampire, while the professionally skilled Mina remains demurely monogamous. . . . Mina's masculine skills and intelligence . . . are a vital part of the struggle against the debased vampire breed. (Eltis 464)

ロンドンという文明化された—あるいはキリスト教的・父権的な秩序の社会

においては、性的な魅力で男性を動かすルーシーは「墮落した女」にカテゴライズされ、一方で今度はミナが聖女へと祭り上げられているのである。吸血鬼になりかけていたミナも加えると、『ドラキュラ』に登場する女性たちは皆吸血鬼であり、彼女たちは男によって吸血鬼に変えられ、また、男たちによって滅ぼされる存在である。彼女たちの命を左右するのは彼女たち自身のセクシュアリティなのは明らかだが、更に言うならば、その善し悪しを判定する男たちの価値観である。現実には十九世紀末に男性は女性の生殺与奪が自在であったわけではないが、吸血鬼というセクシュアリティを肥大させるファンタジーにおいて、彼女たちは皆—吸血鬼に変貌してしまった際は自分を殺すことを委託したミナもまた—男性たちによって生き死にを決められる支配された存在なのだ。

そんな女性たちが男性に対して抱く異心を吐露できる場が手紙である。ミナとルーシーは頻繁に手紙のやりとりをしているが、その中でルーシーが<新しい女>の特徴とされていた性的な奔放さへの希求を見せている。以下はルーシーが婚約についてミナに宛てた手紙の一部である。

We met some time ago a man that would just *do for you*, if you were not already engaged to Jonathan. He is a doctor and really clever. (77)

Why can't they let a girl marry three men, or as many as want her, and save all this trouble? But this is heresy, and I must not say it. (80)

ルーシーは婚約したばかりの友人に結婚相手として似合いだと男性たちの話をしたり、アーサーに対する恋心をあけすけに幾度も吐露したり、三人の男性から求婚された日の手紙に至っては、前述のとおり重婚への憧れすらほめかしている。ルーシーは恋愛や結婚についての打ち明け話を秘密にするようミナに書き送っているのだが、婚約後の手紙では、“I must tell you about the three [proposals], but you must keep it a secret, dear, from *every one*, except, of course, Jonathan. You will tell him, because I would, if I were in your place, certainly tell Arthur.” (78)という言葉が添えられている。この変化は、婚約後の手紙でルーシー自身が書き記している通り、既婚女性としての自覚が芽生えたからだと考えられるが、問題視すべきはそれに続く部分である。

A woman ought to tell her husband everything – don't you think so, dear?

– and I must be fair. Men like women, certainly their wives, to be quite as fair as they are; and women, I am afraid, are not always quite as fair as they should be. (78)

「自分は夫に対して潔白なければならない」と既婚女性としての心構えを説くルーシーだが、「男性は特に妻には潔白でいて欲しいものだが、自分は女性には常にそうであるとは限らないと思う」、「どうして結婚したいという男性すべてと結婚できないのかしら？(Why can't they let a girl marry three men . . . , 80)」に見られる重婚願望等を鑑みれば、社会から求められる貞操観念とルーシー自身の性には開きがあることがわかる。また、ルーシーが秘密にしておくよう頼んだプロポーズの話は、妻として父権制社会に組み込まれることとなったという、社会的には吉報のはずである。しかしそれを秘密にしておいて欲しいと願うのは、恥じらいの他に、自分が父権制から断罪されうる「男を魅了するセクシュアリティを秘めた<女>」であることが露見することを警戒しているとも考えられる。

ルーシーからミナにあてた手紙の中で、“secret”という単語は三回出てくるが、初出の“we have told all our secrets to each other since we were *children*” (77, emphasis added)という内容からも、お互いにこのやりとり全体を秘密とすることを暗黙の了解としていることが推測できる。ルーシーの熱烈なアーサーへの愛の言葉やプロポーズ、重婚願望について、ミナはジョナサンに話しておらず、彼に見せるつもりである日記でも触れていない。つまり貞淑であるとされるミナも乙女同士の秘密を守っており、完全にジョナサンに服従しているわけではないのだ。秘密の保持という点で、ハーカー夫人となったミナは、ルーシーを助けるヒントを求めて訪ねてきたヴァン・ヘルシングに対し、自分の書いた日記を見せはしてもルーシーから受け取った手紙を見せてはいないことも問題だろう。もちろん、ドラキュラの様子がわかる日記だけでも十分助けにはなったのだろうが、無二の親友であるルーシーが瀕死の状態であるにもかかわらず、彼女が受け取った手紙や日記を読んでまでして彼女を救おうとしているヴァン・ヘルシングに対して、当のルーシーが記した手紙を見せないことには疑問の余地がある。また、日記を差し出したミナに対して、ヘルシングは以下のように発言している。

Oh, Madam Mina, good women tell all their lives, and by day and by hour and by minute, such things that angels can read; and we men who wish to know have in us something of angels' eyes. (194)

この内容から、女性が男性に対して偽る必要のない理想の姿でもって男性に行動や思考のすべてを詳らかにすることが望ましいとの主張が読み取れる。それを女性であるミナに対して賛辞の形で明らかにしている点は、あたかも秘密を持つようとする女性たちへの牽制のようでもある。

また、宮地信弘氏は「ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』: ホモソーシャルな男たちの性的幻想」(2011)において、ドラキュラを追跡する際に催眠術をかけられたミナは〈おしゃべり人形〉となることで〈読まれるテキスト〉と化し、男性の支配を受ける形で彼らの中に割り込んでいると指摘している。しかし、催眠術で〈おしゃべり人形〉となって読み取られるのはミナ自身の意識に上書きされたドラキュラの痕跡であり、表面的には肉体の支配権をヴァン・ヘルシングら男性たちへ明け渡し、支配されている状態となつてはいるが、その実彼女の本当の意識は巧妙に隠されたままなのである。個人の手記を管理するということは、その思考を把握するという点で著者に対する超越性・支配権を持つと言えるが、表面的には女性たちは自分たちのテキストを曝け出して支配を受け容れているふりをしつつも、男性たちの目の届かない秘密のテキストを保有しているのである。

II. 男らしさからの逸脱者

Eve K. Sedgwick は、当時の男らしい男たちの間のマチズモな絆の存在と、男らしさを喪失した同性愛者に対する異常な嫌悪の存在を指摘している。一言に同性愛といっても、古代ギリシャなどで見られるような年少者の教育という面を持ち合わせた少年愛と、成人男性同士のそれとでは大きな違いがあり、当時のホモフォビアは主に後者に向けられていた。Sedgwick は、イギリスにおける男性同性愛者のステレオタイプは女々しい男性とされてきたと指摘し、著書 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (1985) では次のように述べている。

If we look at the history of distinctively homosexual roles in England, we

find that something recognizably related to one modern stereotype of male homosexuality has existed since at least the seventeenth century – at least for aristocrats. The cluster of associations about this role (the King James Version?) include effeminacy, connoisseurship, high religion, and an interest in Catholic Europe—all links to the Gothic. (Sedgwick 93)

この男性性を喪失した男の姿にあてはまるのがジョナサンである。彼はカトリックや恐ろしく古めかしい信仰が支配する東欧の国を訪れ、高価なアンティークや膨大な図書を収集するドラキュラに幽閉され、その恐怖体験がきっかけで度々ヒステリーの発作を起こすようになる。言うまでもないが、ヒステリーはかつて女性特有の神経疾患と考えられていた。ここでドラキュラと同性愛を関連付ける一つの要素に注目してみることにする。それは彼が「伯爵」であるという点である。同性愛といっても男女それぞれのものを同一に扱うことは危険ではあるが、この「吸血鬼が貴族である」という点は、Sheridan Le Fanu によって生み出された、少女ローラと同性愛的な親密さを育む吸血鬼カーミラ（カルスタイン伯爵夫人マーカラ）にも共通している。ドラキュラは多種多様なフォビアを象徴しているが、彼の持つ退廃的な貴族性は欲求の対象を幽閉する城や支配する力のイメージを以て彼の同性愛的性質と結びついている。

それでは、他者に知られては困る自分の女性的な側面をジョナサンはなぜ記したのか、また、どうしてその日記をミナに預けたのか。彼は当初ミナに日記そのものを見せるつもりであったとは言えず、ドラキュラの正体に気付き死を意識するようになってから半ば遺書として読まれることを期待しはじめた。この日記はドラキュラの城を脱出して保護された後にミナに託され、後にヴァン・ヘルシングに渡ることとなるが、この日記を受け取ったことで、ミナはルーシーの時と同様に今度はジョナサンの性的な秘密の共有者の立場に置かれるのだ。すなわち、古城の貴婦人の部屋において、ジョナサンが墮落した女たちである女吸血鬼に明らかに性的な含意をもって襲われかけたこと、及び、ドラキュラによって“*This man [Jonathan] belongs to me [Dracula]!*” (62) と宣言されたことを知ったのだ。この発言に同性愛的な含意があることの証左とするため、一連のドラキュラの発言を以下に引用する。

“How dare you [female vampires] touch him [Jonathan], any of you? How dare you cast eyes on him when I had forbidden it? Back, I tell you all! This man belongs to me! Beware how you meddle with him, or you’ll have to deal with me.” The fair girl, with a laugh of ribald coquetry, turned to answer him: “You yourself never loved; you never love!” . . . Then the Count turned, after looking at my face attentively, and said in a soft whisper: “Yes, I too can love; you yourselves can tell it from the past. It is not so? Well, now I promise you that when I am done with him you shall kiss him at your will. Now go! go! I must awaken him, for there is work to be done.” (62-63, emphases added)

また、福田泰久氏は「その名を語りえぬ愛—『ドラキュラ』をめぐる同性愛と性の政治学」（2003）において、明言されていないものの、ジョナサンもまたドラキュラによって吸血されていることが暗示されていると指摘している。女吸血鬼たちのみならず同性であるドラキュラからも、性行為の代理である吸血行為を受けるという点は、明らかにジョナサンが受動的な性へと転じ、男性性を喪失していることを示している。

さて、ジョナサンの日記とミナの問題に戻ると、彼女がその場面に遭遇したわけではなく、ジョナサンの記録として読んだという点に注目したい。文明都市ロンドンの市民であるミナにとって、実際に会うまでは吸血鬼は想像上の怪物でしかない。それらに襲われたと聞いても、まずはそれが精神的錯乱故の妄想であると考えたはずで、ジョナサン自身でさえもそう考えていた。したがって事の真偽のわからない読者たるミナにとって、夫がそのような同性愛的な妄想を抱いた、という事実こそ大きな問題であったはずだ。ジョナサンは女吸血鬼たちに性的な魅力を感じたことを記録している一方で、彼女たちに襲われることを待ち望んでいた。これは男女の優越性が逆転しているのと同時に、＜性的暴力を待ち望む女性＞という男性によって築かれた女性性を体現している。そして引用した伯爵の発言が続くのである。吸血行為は性行為のメタファーであり、そのことは吸血鬼小説を扱う研究の中では半ば暗黙の了解とされている。表面的には餌としての所有物を示す発言であったとしても、やはりその支配欲には同性愛的な含意があることは疑い得

ない。また、Sedgwick は同性愛的な発言が、当時は小説の中においてさえ隠されていたことを指摘している。

One of the most distinctive of Gothic tropes, the “unspeakable,” had a symptomatic role in this series of shifts. Sexuality between men had, throughout the Judaeo-Christian tradition, been famous among those who knew about it at all precisely for having no name—“unspeakable,” “unmentionable,” “not to be named among Christian men,” are among the terms recorded by Louis Crompton. . . . In the paranoiac novel *Melmoth*, for instance, when Melmoth the persecutor finally wears down his victims into something like receptiveness, he then tells them what he wants from them; but this information is never clearly communicated to the reader. The manuscripts crumble at this point or are “wholly illegible,” the speaker is strangled by the unutterable word, or the proposition is preterited as “one so full of horror and impiety, that, even to listen to it, is scarce less a crime than to comply with it!” The trope of the “unspeakable” here seems to have a double function. Its more obvious referent is a Faustian pact, . . . The other half of the double meaning—the sexual half—excluded the exoteric portion of Maturin’s audience (possible including Maturin himself?). (Sedgwick 94)

小説の中の発言においてさえ言葉にしてはならないもの、とされるほどに当時の社会ではホモフォビアが渦巻いていた。女々しさが同性愛者のステレオタイプとして認識されていたということは言及したが、その女々しさ、及びトランシルヴァニアのカトリック的風習に興味を示すジョナサンが、ドラキュラによる支配の宣言を言葉で記録するということは、同性愛体験の告白に等しい。これは父権制社会において男子の尊厳および存在自体を著しく傷つけるものであった。ドラキュラによってセクシュアリティを逆転させられた男女は、それぞれ同性愛者とく新しい女>という社会の価値観を侵す存在へ変化しており、ドラキュラは個人の性というレベルを超えて社会秩序にまで影響を与え得る存在であるとみなすことができる。

ミナはトランシルヴァニアでのジョナサンの空想的な同性愛体験を知って

も彼との結婚を断行する。これは、ルーシーと対照的に、貞淑な理想の女性としての義務の遂行にあたる。ジョナサンは苦痛のあまりに日記をすべてミナに預け、自分はその記憶を封印しようとした。日記の管理に関して、ミナ自身が自分の日記をジョナサンに検閲してもらおうと手紙に書き記している通り、彼女にとって妻の日記は夫によって管理されるべき物であった。つまりミナは、夫を支えるべき妻としての役目と、伴侶の秘密を管理するという本来なら夫のものである役割をも担うこととなる。それに加えて、ジョナサンを救うためとはいえ、ミナは二人のみが読解できる秘密の暗号に等しい速記文字で書かれた彼の日記を、誰にでも読めるようタイピングしてヘルシングやセワードに閲覧させている。第一章で述べたとおり、ルーシーの手記が無断でヘルシングに閲覧されているのに対して、セワードの録音日記は記録者本人の立ち会いのもとミナに披露されていることから考えると、やはり女が勝手に男の手記を読むことは禁忌であり、その逆は許容されていることは明白だ。日記の閲覧権限を自由にできないジョナサンは男性性、ひいていえば、男尊女卑社会において男性にのみ認められている権利をも喪失している状態にあることがわかる。

III. 男同士の絆

次に、ジョナサンが象徴する男らしさを喪失し女性化したと見なされる男性を対象とする同性愛とは別に、男性性を持つもの同士の結びつきについて考察する。ヴァン・ヘルシングとルーシーの求婚者たちは、ドラキュラ退治のために結束するが、一人だけ年の離れたヴァン・ヘルシングは他の男性たちにとって擬似的な父親の役割を果たしている。このような父子関係が男同士の縦の絆と、女性を中心とした男性たちの横の絆が『ドラキュラ』の中に見られる。家父長の象徴であるヴァン・ヘルシングにとっては、家父長制の維持が最大の目的であり、そのために未熟な若い男性たちを自分の仲間にて育て上げ（＝縦の絆）、成熟した男性同士で家父長制を維持するための結束をすること（＝横の絆）は必要な過程であり、これら二種の男同士の絆は男性による秩序の維持へとたどりつく。

まず縦の絆について、師弟関係にあるヴァン・ヘルシングとセワードの間

の手紙の中に見ることができる。以下はルーシーの危機に際して助けを求めたセワードに対するヴァン・ヘルシングからの返信である。

Tell your friend that when that time you suck from my wound so swiftly the poison of the gangrene from that knife that our other friend, too nervous, let slip, you did more for him when he wants my aids and you call for them than all his great fortune could do. But it is pleasure added to do for him, your friend; it is to you that I come. (130, emphases added)

ここからセワードがヘルシングの壊疽毒を吸い出して助けたことがあり、ヘルシングはそのことに非常に恩義を感じていることは読み取れる。それに加えて、この二者間にも吸血に類似する治療行為があったことに着目すべきだろう。目的は違うが、これも血液を傷口から吸いだしたことに変わりはない。このように同性愛的な片鱗を見せる間柄でありながら、吸血による治療を友人に話せと言っているのは一見矛盾しているようだが、女々しい男を対象としない男性性を持つ者同士の絆は、本質的にいかに同性愛的要素が隠れていようと、性的な意図を持たない男らしさの賛美による結束—つまりホモソーシャルなものへと置き換えられ、恥ずべきものではないと認識されていると考えられる。

もう一つ、ホモソーシャルな絆について考察する上で重要な事実が、グループ内からの女性の排除である。紳士である彼らは決して女性を粗略に扱うわけではないが、対等な人格として扱いもしない。ホモソーシャルな男性たちは女性を自分たちの男性性の誇示のため、そして男性たちの絆を保持するための道具と見なしているのである。上記に引用したヘルシングの手紙も良い例で、ルーシーを助けることを目的としているにもかかわらず、助けるのは“he”と表される男性の友人であり、ルーシー本人ではなくその婚約者アーサーであると推察できる。話は全て男性たちだけで進められ、当のルーシーは蚊帳の外に置かれているのだ。生命の危機にもかかわらず、本人や母親は衝撃に耐えられないだろうからその事実を秘密にしておくというのも、女性は男性に比べて精神的にも弱いという思想に基づいているからに他ならない。

彼らが女性を排除した男同士の結束を理想としていることは、彼らの間で

頻繁に交わされる男らしさの賛美からもうかがえる。例えば、ルーシーに血を提供することを承諾したアーサーにヘルシングは“You [Arthur] are a man, and it is a man we want.” (137)と声をかけている。また、ジョナサンの精神的な問題に悩むミナに対して“I [Van Helsing] promise you [Mina] that I will gladly do *all* for him [Jonathan] that I can – all to make his life strong and manly, and your life a happy one.” (195)と慰めていることから、夫が強く男らしくあることがミナの幸福であると考えていることがわかる。彼にとってジョナサンは精神疾患に悩まされる病人ではなく、男性性を喪失した逸脱者であり、彼を「男らしく」戻すことが解決であり、自分たちの仲間として再教育する父の役割なのである。

前述の縦の絆において父子であった男性たちは、横の絆ではルーシーとミナそれぞれを中心とする夫（恋人）たちへと転じる。ルーシーはその顕著な対象である。求婚者たちが皆ルーシーに恋慕の情を抱いているのはもちろんのこと、ヴァン・ヘルシングを含む全員がルーシーに輸血をしているという点⁴に注目したい。血の摂取である吸血が性行為のメタファーであるならば、同じく血の交換である輸血もまたそれに等しい。セワードがルーシーに輸血をした際、ヘルシングは以下のように忠告している。

“Mind, nothing must be said of this. If our young lover should turn up unexpected, as before, no word to him [Arthur]. It would at once frighten him and enjealous him, too. There must be none. So!” (144, emphases added)

彼らの行う輸血に単なる医療行為以上の性的な意味があるからこそ、そのことに対してルーシーの婚約者であるアーサーが怯えたり嫉妬したりするおそれが生じるのだ。また、ルーシーの死後にも彼以外の男性たちが輸血したことはアーサーに知らされない。

⁴ “Lucy gets her wish [bigamy], in one way: all of these men, with the addition of Professor Van Helsing, will have to give her a blood transfusion, thus becoming her husbands, as Van Helsing piquantly points out: ‘Ho, ho! Then this so sweet maid is a polyandrist, . . . even I, . . . am bigamist’(186).” (Wicke 591、[]は執筆者による補足) 他、川本 217-18、宮地 136。

When it was all over, we were standing beside Arthur, who, poor fellow, was speaking of his part in the operation where his blood had been transfused to his Lucy's veins, I could see Van Helsing's face grow white and purple by turns. Arthur was saying that he felt since then as if they two had been really married, and that she was his wife in the sight of God. None of us said a word of the other operations, and none of us ever shall.

(185)

彼らは表面的には淑女であるルーシーの為に結束し、一方で、彼女の秘された性的魅力に惑わされて、男同士の絆を揺るがしかねない象徴的な裏切りと秘密の共有を行っている。

ひびの入ったこの結束を直す方法は、その原因を誘発したルーシーを墮落した女と見なして、救済の名の下断罪することである。宮地氏は吸血鬼ルーシー殺害を、ヴァン・ヘルシングがアーサーに課した一人前の男性となるためのイニシエーションであるとしている。それに加えて、父権性に必要なのは夫や父に対して従順ないわゆる<家庭の天使>たちであり、彼女たちは男性たちの所有する財産でもある。性的に奔放なく墮落した女>は男性の所有物でありながら、主人に従わず、本来更なる財産となるはずの子どもを産み育てるという使命を放棄する許しがたい存在である。当然こうした墮落した女たちは、彼女たちの正当な所有権を持つ夫や父によって断罪されねばならず、そうしない限り家父長制に必要である男性の権威や家庭が失われてしまうのだ。男同士の絆において、無垢でか弱い淑女は結束を強める有益な存在であるが、墮落した女たちは男同士の結束に綻びをもたらす危険な存在である。

道具としての利用価値しか無く、悪くすると敵となり得る女性たちは当然秘密の共有という一種の結束からも排除されていく。しかし、手記という点に注目すると、ミナは女性でありながら男性たちの手記や録音を文字に残すことを許されている。第一章で述べたとおり、ミナは男同士の絆を破綻させる官能性とは無縁であり、逆に<母>及び<妻>という結束を強める存在である。当然秘密を以て対抗する必要の無い安全な存在であり、男性たちの手記を閲覧することも可能なのである。しかしながら男性性を喪失したジョナ

サン以外の手記はあくまで男性たちの許可もとの閲覧であり、また、ミナはそれを一己の人間として読んで思考することを求められているのではなく、彼女が所持するタイプライターのように文字を清書する道具として扱われているにすぎない。

おわりに

『ドラキュラ』には、同性愛を暗示するような絆が存在し、それぞれが秘密を持つ。未婚の女性同士の絆において、ルーシーは自らの重婚欲求をミナに吐露し、ミナの方も、性的な放縦さをひとつの特徴とする<新しい女>に否定的見解を持ちつつも、それに類するようなルーシーの願望をたしなめたり密告したりすることはない。『ドラキュラ』において女性たちはその生殺与奪を男性たちに握られており、彼らの目を逃れて手紙という形で反男性的な本音を吐露している。

一方、男性間の絆は男らしさに対する信奉に基づくものであり、父子間という縦の関係と一人の女をめぐる男たちという横の関係が存在する。前者は後者を築き保持していくために必要な前段階であり、擬似的な父親であるヴァン・ヘルシングは息子たちのような若い男性たちを自分たちと同等な成熟した男らしい男性へと育て上げようとしているのである。男らしさを喪失した男性はそうした絆からの逸脱者であり、追放ないし矯正されなければならず、それを体現するのがジョナサンである。ドラキュラはルーシーの性的欲求を解放するが、ジョナサンの精神にも作用して女性的に変えてしまう。男女両方のセクシュアリティを混乱させるドラキュラは男同士の絆および父権制の脅威であり、だからこそヴァン・ヘルシングらが退治しなければならなかった。

こうした同性愛的な絆は秘密によってより強固なものとなる。同性同士では秘密が度々共有されるが、異性同士ではされず、また、女性同士の秘密は男性に対してのものである一方、男性同士の秘密は、女性化したジョナサンの場合を除いて、同じ男性に対して作られる。男性の支配する社会では、女性が男性の目を逃れようとするのはあっても男性の方は弱者である女性を除外はしても対抗して隠す必要などないのである。ヴァン・ヘルシングらは

ルーシーに輸血したことを彼女の婚約者であるアーサーに秘匿しているが、これは男性たちの絆を乱す裏切りであり、秘密にすることは自然である。言い換えればそのように男たちを惹きつける性的魅力を備えた女こそその絆を乱す敵であり、吸血鬼と化した瞬間にルーシーはその不貞の咎を一身に負わされるようにして杭打たれるのである。〈墮落した女〉である女吸血鬼たちは、秘密裏に心情を吐露するだけの道具としてあることを求められる父権制の軛から放たれた存在だが、秘匿した性的放縦や男性に対する反意をむき出しにしたために男性たちによって罰せられ、結局は彼らの結束を強める道具とされるのだ。

以上のように、それ自体が秘密にほぼ等しい手紙のやりとり、日記の公開に注目すると、異性を排除した同性同士での隠れた絆や、両性間での隔たりが見えてくる。彼らがそれぞれに抱く秘密は、自分たちの絆を瓦解させないためのものであったり、あるいは異性が求める理想像を守るためのものだったり、最終的には男性による支配の〈形態〉を維持こと、そしてその中で両者が安全に生きることを目的として作られたものなのである。

参考文献

Craft, Christopher. "‘Kiss Me with Those Red Lips’: Gender and Inversion in Bram Stoker’s *Dracula*." *Representations* 8 (1984): 107-33. Rev. and rpt. in Craft. *Another Kind of Love: Male Homosexual Desire in English Discourse, 1850-1920*. Berkeley: U of California P, 1984.

Eltis, Sos. "Corruption of the Blood and Degeneration of the Race: *Dracula* and Policing the Borders of Gender." *Riquelme* 450-65.

Foster, Dennis. "'The little children can be bitten': A Hunger for *Dracula*." *Riquelme* 483-99.

Riquelme, John Paul, ed. *Dracula*. By Bram Stoker. 1897. Boston: Bedford/St. Martin’s, 2001.

--. "Doubling and Repetition/Realism and Closure in *Dracula*." *Riquelme* 559-72.

Roth, Phyllis. "Suddenly Sexual Women in Bram Stoker’s *Dracula*." *Literature and Psychology* 27 (1977): 113-21. Rev. and rpt. in Roth. *Bram Stoker*. Boston: Twayne, 1982. 111-26.

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. Ed.

Carolyn G. Heilbrun and Nancy K. Miller. New York: Columbia UP, 1985.

Senf, Carol A. "Dracula: Stoker's Response to the New Woman." *Victorian Studies* 26 (1982):

33-49.

Smith, Andrew. *Victorian demons: Medicine, masculinity and the Gothic at the fin de siècle*.

Manchester: Manchester UP, 2004.

Wicke, Jennifer. "Vampiric Typewriting: *Dracula* and Its Media." Riquelme 577-99.

角田信恵, 「『ドラキュラ』におけるホモフォビア」『英語青年』第143巻, 第3

号, 東京: 研究社出版, 1997年, 142-44.

川本静子, 『<新しい女たち>の世紀末』, 東京: みすず書房, 1999年.

福田泰久, 「その名を語りえぬ愛—『ドラキュラ』をめぐる同性愛と性の政治学」『英

語英文学研究』第48号, 広島: 広島大学英文学会, 2003年, 15-30.

ブラム・ストーカー, 平井呈一訳, 『吸血鬼ドラキュラ』, 東京: 東京創元社, 1971

年.

宮地信弘, 「ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』: ホモソーシャルな男たちの性的幻

想」『Philologia』第42号, 三重: 三重大学英語研究会, 2011年, 155-79.

度会好一, 「『ドラキュラ』と「新しい女」」『英語青年』第143巻, 第3号, 東京: 研

究社出版, 1997年, 139-41.